

第19回「東書教育賞」の審査を終えて

東書教育賞審査委員会

〔A部門〕

第19回「東書教育賞」を受賞された先生方、おめでとうございます。心よりお祝いを申し上げます。

この東書教育賞も今回で19回を迎えますが、先生方の関心も年ごとに高まりまして、先ほど紹介がございましたように、今回のA部門「教科指導や学校経営に関する実践部門」には、小学校139編、中学校83編、合計222編という多数の論文が応募されております。それだけにレベルの高いものが多く、内容において伯仲するものがあり、それらの審査にも大変難しいものがございました。

今回の課題は「生き生きと学ぶ子どもを育てる教育実践」となっております。これは、このところ続けている課題ですが、小学校、中学校を通じて基本となる大切な課題でございまして、私どもは、創意工夫を加えた実践が具体的に記述された論文が集まることを大変期待したわけでございます。

審査の基準といたしましては、次の3点が挙げられます。

- (1) 実践の結果に基いて子どもの姿が具体的に記述され、論じられているか。つまり実践性の観点です。
- (2) 実践の中にどのような創意工夫が見られるかという創意性の観点です。
- (3) 特殊な実践でなく、誰にでも応用できるような一般化への手があるか。また、子どもの発達段階や適時性への配慮が十分になされているか。つまり一般性があるかという観点です。

その他、論文としての体裁が整っているか。例えば、テーマと内容が一致しているかどうかや発表の範囲、字数の制限などを評価の基準として設定し、慎重な審査をいたしました。

論文を読ませていただきましたも、各地の先生方が熱意を持って新しい試みに挑戦されていることが良くわかります。先生方の日常の教育活動に対するご熱心さと情熱に打たれ、いかにご苦労が多いかが察せられると同時に、優劣のつけ難い力作を審査することの難しさを痛感した次第でございます。

それでは、A部門（教科指導や学校経営に関する実践部門）について発表いたします。審査の結果、小学校の部で最優秀賞1編、優秀賞2編、奨励賞4編の計7編を、中学校の部では、最優秀賞1編、優秀賞2編、奨励賞2編の計5編を選定いたしました。

中学校の部ですが、最優秀賞には奈良県北葛城郡河合町立河合第1中学校の「立松大祐先生」の『生徒の自己学習力を育成するための英語学習の工夫について』が選ばれました。

これは、先生が現在の3年生を2年間にわたって指導してこられた実践の記録です。コミュニケーションの手段として英語を積極的に使用し、進んで英語学習に取り組んでいこうとする学習者を育てることをねらいとして、いろいろなアイデアと方法で指導されています。生徒を英語に親しませる方策として、英語に関することを何でも自由に書き溜めていく「Gemノート」作りや、英語の歌を月ごとに1曲選んで全員で合唱することから授業に入るなどの工夫がなされています。また、毎時間の活動では気の合った2人がペアを組む学習方法がとられ、指導内容にもいろいろな工夫が凝らされています。さらに、ALTとの1対1でのインタビューテストや音読テストの実施など、実に様々な工夫が行われています。これらの指導の中で、生徒は緊張感

の中にも英語に親しみながら自ら進んで学んでいこうとする意欲が着実に育っています。夫々の手法には無理が無く一般性もある大変すばらしい実践であることが高く評価されました。

優秀賞には、茨城県龍ヶ崎市立城南中学校の「岡田多恵子先生の『共によく生きようとする心を育てる道徳教育』」が選ばれました。

これは、「道徳」と「総合的な学習の時間」を核にして、地域との連携を深めながら「共により良く生きようとする心」を育てることをねらいとして行われた実践です。

同校は、1学年の「総合的な学習の時間」のテーマとして「国際理解」を取上げており、市内在住の外国人やJICAの研修生との交流会をたびたび行って、夫々の国の事情や文化の違いに触れるなどの体験学習を行っています。一方、道徳の時間では海外でボランティア活動を行っている日本人について学び、「世界の中の日本、国際貢献」について理解を深めさせ「人と共に生きる大切さと必要性」を身近に感じさせています。

人と人、人と自然のふれあいの大切さを学んだ生徒達は、地域で行われる様々な行事にも積極的に参加したり、地域の人を講師に学習活動を行ったりして、活発に地域と学校の交流が行われています。

最近、対人関係がうまく取れないことなどから、些細なことですぐに「切れ」たり、「自分さえよければ」という自分中心の若者が増えていることが社会問題となっています。示唆を与える実践となっています。

もう1点の優秀賞は、山梨大学教育人間科学部付属中学校の「清水宏幸先生の『作業を取り入れて考える力をのばす数学の授業』」です。

これは、3年生のクラス全員に「辺の長さが同じ正四角錐と正四面体の2つの立体を、合同な面で張り合わせると何面体になるか」という課題を投げかけて考えさせる授業実践

です。実際に模型を作って課題解決を図るまでの4時間の実践ですが、3年間に学んだ図形に関する知識を総動員して考えさせる骨のある問題となっています。

最近では、粘り強く考え試行錯誤しながら自分なりの考えをまとめていくという経験が少なくなっており、数学的な考えを養う大変良い試みだと思えます。生徒が、模型を作って考える段階では多様な方法で課題に取り組む姿が見られます。生徒の興味・関心を高め、数学的な考え方が育っていく過程がよく分かる実践です。

以上、A部門の最優秀賞、優秀賞を得られました論文について申し上げましたが、このほかに奨励賞、また入選とされた論文がございます。いずれの論文を拝見いたしましても、今現場の先生方が、子どもたちにしっかりとした基礎・基本の学力を身につけさせることに、いかにご苦心なさっているか、実践がいかにご苦労があるかということがわかります。また、一人ひとりの先生が、現場の第一線で子ども達を前にして、いろいろと創意工夫をいただいているかということが、はっきり読み取ることができ、大変頼もしくそれが大きな成果ではないかと感じた次第でございます。

どうか、東書教育賞に応募されたこの経験をこれからも生かしていただき、実践の中で一人でも多くの子どもの学ぶことの楽しさ・面白さを味わわせていただくことを期待し、いっそうのご研鑽を期待いたしまして、概要説明を終わらせていただきます。

(寺崎昌男)

〔B部門（情報通信メディア活用部門）〕

第19回東書教育賞B部門の入賞の先生方おめでとうございます。B部門はいまご紹介がありましたように、情報通信メディアを活用する部門でございます。

今これに関係する教育にある意味では追い風が吹いているという状況があります。昨年はe-ジャパン戦略が見直され、e-ジャパン戦略のⅡが政府から発表されました。重点計画の2003というものが出来て、教育に関してはe-ラーニングへの取り組みや、情報関係の人材育成が重視されるようになりました。e-ジャパン戦略のⅠで、初等中等教育レベルでの情報通信技術への投入が、相当前倒して進んだということで、Ⅱのほうは高等教育に若干シフトしました。初等中等に関してはデジタルなコンテンツの整備をしようというところに重点が移ってきています。タイムラグがありますのでe-ジャパン戦略のⅠの時代に初等中等教育への情報通信メディア活用を重視したということの成果がポツポツ現れ始めてきて、今年も十分な成果が上がりつつあるようでございます。

もう一方で、文部科学省を始め、日本全体の関心が、確かな学力を伸ばすということにあります。確かな学力を伸ばす素晴らしい手立ての一つに情報通信技術があるのではないかと、情報通信メディアがあるのではないかとということで、この二つの要因、もっと他にもあると思いますが、大きな追い風となってこの部門に影響を与えてきたということでしょうか。先程ご紹介がありましたように、このところ論文がなかなか集まらないので悩んでおりましたけれど、今回は33編応募がございました。B部門が新設された第10回東書教育賞が39編でしたから、それに次ぐ多くの応募をいただくことができたわけでございます。ますます、上向きになるだろうと思っております。小学校で20編、中学校で13編ですが、内容的にはメディアの特性を生かした総合的

な学習の時間での使い方が9点、確かな学力を反映して、社会科5点、数学・理科・技術で各4点ずつというふうに、結構教科の学力を伸ばすためにメディアを使う工夫というのが、良い論文・良い実践としてまとまってきたわけでございます。

このB部門の審査の基準は、A部門と同じですが、それに加えて、情報通信メディアが効果的に有効に使われているか、という観点に加わっているわけでございます。そういう観点から審査をさせていただきましたが、残念ながら最優秀賞は該当なしということになりました。最優秀賞に当たるような良い内容のものもあるのですが、基準のひとつに一般性というものがありまして、どこでも、どの学校でも使えるという基準があります。これがちょっとつらいかなということで、優秀賞2編とさせていただきます。それから奨励賞が2編、入選が3編というのがB部門の成績でございます。いずれにしてもたいへん高いレベルの論文が揃ってうれしく思っているわけでございます。

優秀賞の一つは、岡山県苫田郡鏡野町立香北小学校の岩野浩昌先生が代表としてお書きくださっておりますが、先生の前任校での実践をまとめられた「メディア活用の工夫をした国際共同学習の実践」です。メディアを使わなければならない素晴らしい実践が報告されました。総合的な学習の時間を活用して、命と暮らしを支える大切な水について、世界8ヶ国の子ども達と一緒に国際共同学習をしようということでございます。水辺の生き物調べや、水を暮らしの中でどう使っているかを勉強するときに、外国の子ども達と一緒にやってみないかと、教師のほうから提案すると、子ども達が「やろう、やろう」とのってきました。それではどうやって外国の子どもと連絡をとるかということですが、国際コミュニティ、e-ビレッジというネットワーク

がありますがそこへホームページで参加者を募りました。そうしますと南アとかベナン、エジプト、デンマーク、アメリカ等8カ国10団体が参加をしてきたそうでございます。これをただつないただけではうまくいきません。何か心のつながりまで広げなければいけないということで、もう一つの工夫がされております。トラベルミッションという方法で、相手と交流したいときに、マスコットを送ってしまう。ネットワークだけでバーチャルに連絡を取るのではなく物を送る。水の学習ですから水辺の生き物についてのデザインを考えて、それをマスコットに作るんです。ここで保護者の方のお力でかわいい素晴らしいマスコットができています。これを送って一緒に勉強しようということになる。そうすると、相手のホームページ、例えばデンマークのホームページに子ども達はそのマスコットを抱いているところの写真的のりたりします。お互いにそういうことをきっかけにして勉強が始まるわけです。小学生ですので、英語もデンマーク語もおぼつかない。幸いにして画像が送れますので、絵とか写真を多用するわけです。できるだけ英語にするところの部分は少なくして昆虫の絵だとか、魚の絵だとか、写真だとか、これをやりとりしていくわけです。ある時点でデンマークから、家庭で使う水がどのくらいの量かというデータが送られてきます。日本の子ども達も、日本の家庭の水の使用量を調べます。他の国々もこれに同調して共同の学習が進んだようです。その中で、アフリカではものすごい干ばつに苦労しているとか、ベナンでは雨水をバケツに溜めて使っているとか、水は地域によってもものすごく大切なんだなということを実感したり、水の問題の深刻さを学習していきます。それにとどまらず自分達に出来ることは何だろうと考え、水が大事だということをアピールしようということで、自分達の考えをポスターにして世界に発信します。子ども達は、日常

の生活でも水を大事にするようになってまいります。こうしたことは、インターネット情報通信メディアがなければできない学習です。従来は教室の中だけで行われていた学習が、これが今でも主ですが、それが日本に広がり、世界に広がり、地球をまたにかけた学習の場で行われている。すばらしい実践でございました。

もう一つの優秀賞は中学校の実践です。お茶の水女子大学附属中学校、前川哲也先生が代表執筆されました「インターネットフォーラムを活用したエネルギー・環境問題の討論」です。これは、三菱総研の技術的なサポートを受けられて、ずいぶん良い学習が展開しております。附属中学の1年生が対象ですが、全員が入学前になんらかの形でコンピュータを使った体験をもっています。インターネットも多くの生徒が経験していて、チャットや電子掲示板も体験している。学校では学級通信をメールマガジンで発行したりしていますが、そういう雰囲気の中にずっと溶け込んでこられるような子どもたちです。ただ附属であっても一般的に中学校はそうだと思いますけれど、子ども達は授業であまり発言しません。良いものを持っていて、言いたい事があるんだけど日本の子供達というのはなかなか発言しない。特に中学校になるとなおさら発言しなくなってしまう。紙に書かせたり、メールに書かせたり、個別に聞いたりすると、良い意見を言うんです。そういうときにこうしたネットワークを使って意見を言わせる。インターネットフォーラムという場を使って意見を言わせたらどうだろうか、というのが一つのポイントになっています。生徒は個別に三菱総研にあるサーバーにアクセスして、フォーラムで討論をしています。対象はエネルギーと環境ですから理科の授業です。これはカリキュラムがすばらしくて、7週間かけて毎週テーマを変えつつ話し合いをしています。第1週がエネルギーの消費、第2週

は資源の枯渇の問題、第3週は二酸化炭素がどれだけ増えていって地球にどういふ影響を与えるか、それを減らす工夫は第4週目、第5週が省エネの問題、6週が新エネルギー、7週が地球に優しいエネルギーとなっています。第4週から5週にかけては、教室での授業にもちこまれていますが、そこでは省エネ班、原子力班、緑化班、リサイクル班、新エネルギー班、炭素税班といったような班にわかれ、それぞれのプラスマイナスを議論して、その方法が良いか悪いかを理由をつけて判断する、という授業を展開しています。それまで生徒は、個別にフォーラムで話し合いをやっていましたから、授業がたいへん盛り上がるし、深まるわけでございます。情報メディアの活用というところらにかく振り回される授業が多いのですが、前川先生の場合は1週から7週までに内容的に積み上げていくカリキュラムが素晴らしい。私も審査員は、道具として使うのは慣れてるし当たり前だと思っておりますが、内容の積み上げの点がこれは素晴らしいということで高い評価をさせていただいたわけでございます。いろいろデータを読ませていただくと、インターネットフォーラムには327件の投稿があり、投稿者は参加者138名のうち74名にわたったそうです。最初はエネルギーとか環境に対する感想だったものが、資料とか他の人の投稿をもとにしてコメントするというような、本当の学習、深みのある学習に広がっていったわけでございます。フォーラムの運営といいますか、フォーラムの中は二つの部分で構成されていて、一つは「調べよう！」で、子ども達に調べさせるためのリンク先、もう一つは「話し合おう！」といって子ども達同士が投稿して意見を交わす場を提供しておられます。いろんなメリットがありまして、自分の部屋に居ながらバーチャルな教室、仮想的な教室で勉強ができる、これは素晴らしいことです。自分の部屋でやりますから自分の意見がいっぱ

い出てくるわけです。教室だと一人がしゃべっていると聞かなければならないし、しゃべるのにも抵抗があるんですけど、ネット上だとかやって誰もが好きなときにしゃべれるわけです。そういうメリットがあります。自宅で学習できますから家族もいる、資料もある。家族の方と話し合いをするというような、教室の中では起こりえないことがらが勉強の場として広がっていく。保護者の方も子どもの学習に関心を持ってくださるし、このテーマに関して実践の影響の広がりが考えられる。

この二つの実践から、やはり学習の場が日本中に、世界中に広がっていているという感じがいたします。私はそれが本当の学習であって、学校に閉じこもってやる学習はむしろ例外的なものではないかと思えます。日常生活では、ネットワークを使うのが当たり前になってきました。教育もそういうふうになってきました。ネットワーク、あるいは情報通信メディアを使って教育の場が広がってきました。もちろん面と向かってやる教育も大事で、教育の本質が身に付けられやすいし効果も上がるわけです。しかし、今までは教育に対する見方が狭かった。これが180度逆転してきたと、いつそれが日本中に広がり世界中に広がって教育観の逆転が起こるかなと楽しみにしているところでございます。そうしたことを思わせるような研究が出てきたなあと感じた次第でございます。そのほか教科の方で数学とか、音楽とか、コンピュータのよさを活用した論文が奨励賞に入っているわけでございます。これからは情報メディアを活用した現場の実践がますます広がって行って、私どもの教育に対する見方を変えてくれるような論文が出てきてくれるとうれしいなと思っている次第でございます。本当に入賞された方々おめでとうございました。

(坂元 昂)

各審査委員の講評、所感

〔奥田眞丈〕

ご紹介いただきました奥田でございます。審査をさせていただきましたが、私は教育は実践あるのみということを、身上としております。よき実践で、子ども達一人一人が成果をあげるということを期待するわけですが、よき実践のためには、よき計画を立てなければならぬわけです。その計画を立てる中心になるのは先生方であるのは当然のことでございますが、今回先生方のご努力が実ったことを心からお祝いしたいと思います。私は勤めの関係で西のほう、特に関西地方の府県の第一線の先生方と接触する機会が多くありますが、拝見いたしますとなかなか計画を立てるのに、先生方一人一人が苦勞しておられます。新しい計画を立て、子ども達の期待にそいたいということは、気持ちとしてわかるのですが、そんな先生方を思いますと今日入賞された先生方の入賞の成果、中身というものはぜひ任地にお帰りになりましたら周辺の学校に、さらに広く全国的に先生方のご経験を広めていただきたいと願う次第でございます。そして良き計画を一人一人の先生が立てていただき、良き実践をしていただくなれば、一人一人の子どもは良い子どもになってくれるのではないかと期待しているわけでございます。今日はおめでとうございました。

〔杉山吉茂〕

入賞された先生方、おめでとうございました。入賞された方々を見ますと、今年も算数と数学がA部門の小学校、中学校、そしてB部門にもあって、数学教育を担当するものとしてはとてもうれしく思います。いろんな研究会でも、算数・数学の研究会に参加される先生がどんどん増えていて、この教科の裾野が広がっていること表れだと思えます。また、学力低下の問題がありますが、皆さん方も実

践研究をもとに、学力の低下が起こらないようにしていただければと思います。審査にあたって感じたことですが、私は創意性と一般性がとても大切だと思います。と同時に読ませていただいて良い実践をされているのだらうなど、想像はできるけれどその良さとか感動が伝わらない論文が結構あったと思います。良い実践をすると同時に、この教育賞の論文を書くにあたっては、その良さと感動が我々に伝わってくるような、こちらから解釈しないと分からないのではなくてそういう書き方をされると良かったと思います。ここに入賞された先生方の論文はそういう点でも良かったと思っています。どうもおめでとうございました。

〔多湖 輝〕

先生方、おめでとうございました。東書教育賞も19回、およそ20年前というと、私はその頃、多分千葉大学で附属小学校の校長を併任していたのだらうと思います。私は例年、批評は先生方がいろいろなさってくださいるので、新春の所感のようなことを申し上げております。とにかく世の中おかしいですよ。人類は決して良い方向に向かっているとは思っておりません。私は、世の中が大きく動くというときは少しじっくり考えなければいけないと思って、終戦の時も二ヶ月ほど寺にこもって座禅を組んでおりました。しかし、その後アメリカで、70年くらいでしたか、ヒッピーが出てきた時には、ヒッピーもやってみました。そうするとやはり何となく薄々でもヒッピーが何を考えているか分かるような気がするのです。私はおっちょこちょいで何でもやるほうですから、実は今年の春は山籠りをしておりまして、皆さんびっくりされるかもしれませんが、得度するという決意をいたしました。剃髪はしません、生臭ですから。剃髪はしませんけれど衣を着て世の中考えてみたいという心境に今なっております。コンピュータが

すぐく進んで、世の中がどんどん目まぐるしく変わります。我々、高齢のものはついていけないほどの激動です。しかし、果たしてこれで良いのかと、今教育の問題も真剣に考えて、もっともっと人間そのものをしっかりと問い続ける、そういうことを教育がやっていけない限り、なまじ何か物が出来るなんてことはどこかへすっ飛んでしまうのではないかと思うのです。ご承知だと思いますが中国は今、公表13億と言っておりますけれど、14億、あるいは15億という人もいます。インドもだいたい前に10億を超えました。世界の人口比からいって、その何十億分の一の優秀な人間というのはやはり凄いです。一流の企業なんかでシステムの大変革をやるなんていうと殆んどインド人がやっているんです。私はびっくりしましてね、こういうトップシークレットに関するものをやらせて良いのかと言ったら、とにかく出来ますからねと言うんです。そういう人たちも世界にいる。その中で日本はいったいどういうことをやらなければいけないか。私は日本の古来の思想・哲学・宗教そして、これからは先生方もキリスト教・イスラム教・ヒンズー教・仏教そういうものを、しっかりとお考えになる、あるいは哲学というものを少し勉強していく、そういう中で人類が行くべき道、教育の根本を問い直すということもぜひやっていただきたいなとそんなふうに思っております。勝手なことばかり毎年言うので皆に笑われているのですが、そういうことでひとつがんばってください。おめでとうございます。

〔三上裕三〕

受賞されました先生方、おめでとうございます。私は小学校の立場から拝見させていただきました。ひとこと感想を述べさせていただきます。さきほど応募状況のところで報告がございましたけれど、小学校の応募状況が、年々非常に増えているということで、心強く

思っております。そういった中で、これまでどちらかという総合的な学習に偏っていましたが、現在でもまだ多いようですけれども、だんだん国語、算数、理科、社会と教科の指導にウェイトがかかっているということで今後ともそういった面での基礎基本についての研究が深まっていくことを期待しております。最優秀を受賞されました、稲垣香依先生、先程委員長の方から詳しくお話がございましたけれども、稲垣先生の4年生に対する伝え合う力を育てる国語の授業ということで子ども達が空想物語を作ってそれを発表するということを通して、子どもの言語能力を高め、伝え合う力を養っていくその過程が、非常に良く表わされているのではないかと思います。また子ども達が非常に楽しみながら物語作りをしている。出来上がった物語を低学年の子ども達に読み聞かせをしたりしている様子が、本当にかわいらしい4年生の姿が浮かんでくるようで、これは稲垣先生の優れた感性と子ども達に対する深い愛情がよく表れた論文ではなかったかと思えます。それから、優秀賞には井上裕一先生、太田真理子先生の論文が選ばれましたが、特に太田先生の低学年の子ども達にボール運動の指導をする場合、ゲームの楽しさ、ルールそういうものに気付かせながら、どのように子ども達にゲーム感覚を育てていくかということ、非常に私はすばらしい実践ではなかったかと思えます。子ども達がそれぞれ自分の目的意識を持って、向上しようという姿がよく表れていたように思います。日ごろから、先生が子ども達一人一人をよりよく知り尽くした上での実践ではなかったかというふうに思えます。今後の期待ということで申し上げますと、この前指導要領の一部改正がございましたけれど、発展的な学習ということが各学校で実践が非常に進んでくるのではないかと思います。そういった発展的な学習に関する内容とかあるいは指導形態・方法といったこ

とについての研究が今後積極的になされることを期待して私の感想とさせていただきます。誠におめでとうございます。

〔赤堀侃司〕

まずはおめでとうございます。私も毎年拝見させていただいて、審査委員の先生方のお話を聞くのも大変楽しみにしています。

ITというのは光と影というものがありまして、教育ではいかに光と影を見極めながら使っていくかということが重要だと思っております。今回は、内容ではWebをいかに活用するかという研究が多く見られたように思います。これも光と影があると思っております。コンピュータのプログラマーがどうやってプログラムを獲得するかという論文があるのですが、これがなかなかおもしろいのです。イメージ的には自分の部屋に閉じこもって、コンピュータの前でやっているというイメージがあるのですが、実はそうじゃないとその論文には書いてある。どういうふうに書いてあるかというと、今日はこういうところであまいアイデアを見つけたとか、ここで困っているとかいうのを、コーヒープレークタイムに集まる部屋があって、そこで情報交換してそれが実は最も素晴らしいプログラムのノウハウを吸収する場である、つまりプログラムを吸収する場というのは井戸端会議なんだというのがその論文の結論なんです。全く賛同いたしました。なるほどその通りだと、教科書に書いてあることは見れば分かる、でもそのレベルでは知恵は出てこない。知識はあっても知恵は出てこない。知恵を吸収するにはどうしたらいいんだと思ったら、やはりコミュニティが必要なんです。会議をする場が必要なんだという論文でありまして、おもしろいなと思ったのです。今回の受賞作品もWebというのはそういう意識があると思うのです。そこで自分の考えを共有していこうという流れが非常に多くなる。自分自身の体

験ですが、某大学の非常勤にいらっしゃっていて、そこでやった議論を掲示板で出させます。おもしろいアイデアがいっぱい出てくる。授業で質問しても殆んど何も言わないような学生が素晴らしいアイデアをそこで出してくるんです。なるほど井戸端会議だと。井戸端会議をWebでやっついこうと思ったときに、世の中がだいぶ変わってきたなと実感いたしました。それはコミュニティという話であります。井戸端会議というコミュニティが変わってきたんです。このコミュニティも光と影があって、下手をすると個人情報の漏洩やら様々な問題を呈している。これをどうやって情報教育ではきっちりしたコミュニティを学習のために作っていくかという課題が強く投げかけられている気がするんです。従ってこの諸刃の剣のような道具を教育の中でどう使うかということは大変重要な課題だと私は認識しているわけでありまして。先般、村上洋一郎さんという有名な科学者の講演を聴きましたが、非常に面白いことを言っておられました。ITはドラッグだと、薬だと言っておられました。麻薬かもしれない。確かに副作用もあります。劇薬かもしれませんが、こういう道具を我々が今手に入れながら教育という接点の中で活用していかないと逆の面で非常に恐ろしいことにもなるし、またある面ではたいへん素晴らしい道具を今、我々は手に入れつつある。またコミュニティの概念やら、いろんなものが大きく変換しつつあると思うんです。そういう点で教育の中で、ぜひ有効活用していく、その実践をこの中で広めていくというたいへん役割としては重要ではないかと思っておりますので述べさせていただきました。

〔堀口秀嗣〕

受賞された先生方、おめでとうございます。坂元先生がたいへん詳しく優秀賞の作品についてご紹介されましたので、私のほうは奨励

賞の作品を中心にコメントしたいと思います。奨励賞を得られました青木先生の数学の内容でございますが、青木先生は数学の部屋という、中学校の数学の先生なら知らない人はいない位有名なサイトを立ち上げて運営されておられます。そういう中にたいへん素晴らしい実践が紹介されていて、先生ご自身もたいへん素晴らしい実践をされたわけですが、そういう意味では情報の共有化という、しかも一つの学校に留まらず、日本国中の学校の先生方の知を集められている取り組みは素晴らしいと思います。ただ教育賞の論文として考えたときに、たくさん実践を少しずつ取り上げておられた部分で、子どもたちの姿が見えない、子ども達がどれだけ変化していったか、どれだけ盛り上がり学習していったかという姿が見切れないという意味で奨励賞になったと思います。数学分野への貢献は大きいのですが、論文賞として奨励賞になってしまったということでご理解いただけたらと思います。それから、山崎先生の実践ですが、音楽が苦手な子ども達も楽しんで一緒に取り組んでいるという姿を、ご紹介いただきました。私はたいへん気に入った部分があるのでちょっと読み上げさせていただきますが、和音をそれぞれつけていって作品がほぼ完成したところの話です。『二人でイヤホンに耳を傾け、一人が自分の気に入った和音の組み合わせを選び、もう一人に意見を聞く。あちらこちらから「わあ、これいい。」という言葉が聞こえてくる。鍵盤楽器ができなくても、自分の感覚を評価してもらえる瞬間である。中には、二人で握手しあっている子ども達もいた。特に、音楽を苦手だと思っている子、楽器の演奏が苦手な子ども達ほど自分の気に入った和音伴奏ができたときの喜びが大きいことをその表情からうかがうことができた。』というふうに書かれています。こういうふうな子どもの姿が生き生きと書かれているというのは素晴らしいなと思います。コンピュー

タといますか、ICPを活用していく学習活動は全国でたくさん取り組まれていますし、そういう実践の中には、素晴らしさもあるわけで、ぜひこういう子どもの姿を生き生きとご紹介いただくような論文をたくさん書いていただけたらありがたいと思っています。コンピュータの教育利用に関しては、昭和60年が元年ということで約20年前になります。以後5ヵ年ごとに、希望する学校から全ての学校にパソコン室を設置してきました。そして2000年ごろからは全ての教室にコンピュータを設置してどこからでも活用できる環境を作ろうとしてきているわけです。これからは是非、そういう環境を活かした実践及び取り組みの工夫を続けていただきたいと思っています。アメリカでは2020年を目指した教育界の取り組みや施策が今具体化しようとしているところです。半導体の世界というのは18ヶ月から24ヶ月で倍になるというルールがずっとほぼその通りに進んできているわけです。このペースで進むとして、20年後を単純に考えてみますと、どのくらいになるかという、約千倍になるわけです。容量が千倍、性能が千倍ということになります。日本の施策が始まってから20年ですからほぼ千倍になってきたわけです。それが今からさらに千倍になろうという、そのところまではとても見えませんが、少し先を見ながらぜひそういう世界がどうなるか、どうしたいか、それが教育にどううまく活かせるかということをお考えいただきながら今後も、新しい実践をたくさん取り組んでいただけたらありがたいと思っています。

〔安齋省一〕

中学校についてお話をしたいと思います。最優秀賞を受賞された立松先生は、教職経験十年に満たないお若い先生です。先生ご自身でおっしゃっているように、一つ一つの取り組みは決して特別なものとはいえませんが、自己教育力を中心に据えた実践である点が高

く評価されたものです。今後の発展・深化に多くのことを期待したいと思います。

優秀賞には清水先生と岡田先生が選ばれました。清水先生の実践は作業を取り入れて生徒の考える力を伸ばすというのですが、実践が特定のものであり一般化されていないという課題を残しているように思います。岡田先生の実践の課題は、仮説の曖昧さにあると思います。「人と共に生きる」や「地域と共に生きている自分」といったことが具体的でなく抽象的です。仮説が抽象的であれば、仮説を検証することは極めて困難であると思います。

奨励賞に選ばれた河原先生の実践は大変興味深いものでしたが、残念なことに学習活動についての記述が不十分でした。同じく奨励賞に選ばれた小山先生の実践は時宜を得たものとして評価されるものでした。

最後になりましたが、応募論文の記述の仕方について私なりの考えを述べてみたいと思います。私は「東書教育賞」は教育実践を対象としたものであって教育研究を対象としたものではないと考えています。一部に研究論文のようなものを散見しますが、ぜひ本教育賞の趣旨をご理解いただきたいと思います。(原稿)

〔高葉康雄〕

今回の応募論文を拝見して、まず感じたことは、先生がたがいろいろな素材を子ども達の身近な所から見つけて、それをうまく教材として組み上げ、学習活動を指導なさろうとして努力しておられることです。最優秀賞を受けられた稲垣香依先生は教科書の教材を手がかりにして、子ども達一人一人に空想物語を作らせる活動を展開しておられます。それが、お話作りから表紙作成・製本へ進み、さらにそれをみんなの前で発表して、お互いに批評しあう、というやり方で、読むこと、友達作品を聞くことの学習へと発展させてお

られるわけで、国語の指導としての筋を通していているのがすばらしいと思いました。しかも、1年生の子ども達に対しての読み聞かせで、自分達の学習活動を他学年にまで広げる試みは、いわば下級生への動機付けにもなるのだと思いました。稲垣先生の指導で、もう一つ感心したのはお話作りの指導で、起・承・転・結という物語の構成をしっかりおさえておられることです。こういう段階をしっかりとおさえて指導するという姿勢は、他の先生方にも見られました。

優秀賞の井上裕一先生は、地域の歴史的建造物である通潤橋を手がかりに、体験・見学から物語作り・劇化へと活動を進める中で、つかむ・さぐる・ふかめる・広げる・まとめる、という展開をとっておられます。また、同じく優秀賞の太田真理子先生は、ボールゲームの基礎を低学年の子ども達に指導する実践を論文になされたのですが、鬼遊びで追いかける・逃げることを経験させ、ルールも学ばせるところから始めて、ボールを目標に向かって投げること、ボールをパスで投げる・受けることに慣れさせ、バスケットボールのゲームに導く、という系統化を試みておられるのが大変興味深く思いました。

実は今回は中学校の論文はすこしマンネリ化しているように思いましたが、最優秀賞を得られた立松大祐先生の論文は、Gemノート、絵日記といった生徒自身の学級活動に加えて、先生の側から働きかけとして、インタビューテスト、シャドーイング、基本文練習帳、定期テスト、振り返りシートといった試みをすることで、生徒の英語でのコミュニケーション能力の確実な定着を目指そうとしておられる様子が具体的にのべられていて、感銘を受けました。

(原稿)

